

図書館だより

vol.32 No.4

北海学園大学附属図書館報 第32巻4号(通巻196号) 2011.1.19

Bulletin of the Hokkai-Gakuen University Library



2 川上武志
英国湖水地方を訪ねて

3 田口 晃 上田雅幸
私が薦めるこの1冊

4 切替英雄
本の運命

5 アルバイトーク

6 **2010年度図書館利用
ガイダンスアンケート結果速報**

8 **お知らせ
編集後記**

英国湖水地方を訪ねて

文＝川上武志

(かわかみ たけし／人文学部教授)

(ウインダム湖と島々：筆者撮影)

英国湖水地方のやや南に位置するウインダム湖（長さ18キロ、幅1.5キロ）は、南北にリボン状に広がる湖である。その東岸の中央にボウネスという町があり、多くの観光客がここに足を向ける。ウインダム地方の中心地となっていて、その坂道に沿ってたくさんのショップやレストランやホテルが立ち並ぶ。シーズン終盤とあって、町は観光客でかなりの賑わいである。早速、栈橋へと急ぐ。遊覧船でのレイク・クルーズを楽しむためである。船着場の前の湖上には、ベル島（Belle Isle）という長さ1キロほどの島がでんと横たわっており、対岸がほとんど望めない。ようやく島の右側に聖母島（Lady Holme）が浮かんでいるのが見える。遊覧コースは三種類あるが、湖南のレイクサイドに向かうことになった。船はベル島の脇を通って南下していく。そして、この島の南側の木立のあいだに、詩人ワーズワースもその不調和に眉をひそめた「白亜の館」がちらりと見えた。実は、ウインダム湖での湖上周遊によってひそかに確認したいことがあった。

ウインダム湖は、ワーズワースの子供の頃の遊び場の一つであった。ワーズワースが8歳のとき母が亡くなる。女手がないのに困った父親は、ワーズワースを兄リチャードとともに、ボウネスの対岸の丘陵地に位置するホークスヘッドのグラマー・スクールに入学させる。兄と一緒に下宿生活をするなかで、4年後にその父も他界する。湖水地方の自然は、ワーズワース少年にとって両親の胸のようなところであったであろう。ところで、彼の代表作である自伝長詩『序曲』の第1、2巻には、少年時代の思い出が綴られている。そのなかに次のような部分がある。

しかし日の暮れないうちに
一行はボートに乗り夕闇迫る湖水を
急いで家路に向かった。が、途中、ふと
とある小島に進路を曲げて、仲間のうちで吟遊詩人をもつて任じている少年を

一人その島に残して、一行はまたゆっくりと、
島を離れた。取り残された少年は、たった独り、
岩に腰をおろしてフルートを吹いていた。

（『序曲』第2巻、170～177行、岡三郎訳）
この「一行」とは、ワーズワースとその学校仲間のことである。ここで語られるのは、彼らがウインダム湖の東岸でのボート遊びに打ち興じた後、その帰りの途中に起こった、ちょっとした悪戯のことである。先に述べた、確かめたかったことは、この少年が独り残されたという小島が、どんな風な島かということなのである。ベル島の東に浮かぶ、ワーズワースが「鈴蘭が一面畑のように咲き誇る姉妹島」と表現している鈴蘭島（Lilies of the Valley）か、その少し北よりあるトムソン島（Thompson's Holme）のどちらかではないかと目星をつけていた。後で、夕暮れの中を仲間の誰かが、この少年を「救出」しに行ったはずだから、さきほどの聖母島では湖の西岸からは遠すぎる。ところが遊覧船の航路からは、そのいずれの島も南に延びるベルの島陰になって見えないのである。

ということで、こんどはボウネス栈橋から二十分ほど歩いたところにあるフェリー乗り場に向かった。童話『ピーターラビットのお話』の作者ビアトリクス・ポターのヒル・トップ農場を訪ねることになっていたのである。フェリーで対岸に渡ってみると、懸案（？）の島が見えるのではないかと、それこそ渡りに船とばかりに内心喜んだ。悪いことに雨が降ってきた。それに湖上が雨煙で霞ってきた。対岸に到着してみると、船着場の先端の直ぐそばにある烏島（Crow Holme）が、またもや視界を遮っていたのである。

結局、帰国してからネットで調べてみてみたのであるが、グーグルの航空写真を手一杯拡大してみると、どうやらトムソン島にはたくさん砂州状の部分が広がっていて、多分ここではないかと勝手に判断する次第となった。

私が薦める
この1冊

米原万里著

『オリガ・モリソヴナの反語法』(集英社、2002年)

文= 田口 晃

(たぐち あきら／法学部教授)

旧制高校生の愛読書だったショーペンハウアーの読書論では、読後に自分で考えることの大切さが、繰り返し力説されている。それに触発されて50年前から読書ノートをつけてきた。

学生の皆さん向けに一冊を、ということで、大学初年次のものを引っ張り出して覗いてみると、当時はトルストイ、ドストエフスキー、トーマス・マンといった翻訳小説をせっせと読んでいた。それぞれの作品から強い感銘を受けており、その中から一冊を選ぶのは難しい。そこで、今年2010年の読書ノートから米原万里『オリガ・モリソヴナの反語法』を挙げることにしたい。2002年に出版された単行本の文庫化されたものをこの夏買い求め、あまりの面白さに一日で読んでしまった。

ブラハにあった共産党の子弟向け国際学校でダンスを

教えていたオリガ・モリソヴナと言う女性教師の過去を調べる謎解き物語。旧ソ連の歴史に関心を持つ小生には、とりわけ女子収容所の話や、ペリヤの秘話などが興味深かったけれど、ソ連の歴史に格別の関心を持たぬ人にも、多彩で抱腹絶倒のエピソードや多層などんでん返しもあるので、充分楽しめると思う。それに、反語法という今では殆ど滅びつつある表現法に光を当てている点も、日本語の表現法をもっと豊かにする、と言う観点から好感が持てる。

この本が面白かったら、同じ著者の『嘘つきアーニヤの真つ赤な真実』という名著か、今年井上ひさしの絶筆として出版された『一週間』も関連書としてお勧めだ。

私が薦める
この1冊

エリヤフ・ゴールドラット著(三本木亮訳、稲垣公夫解説)

『ザ・ゴール』(ダイヤモンド社、上・2001/下・2002年)

文= 上田 雅 幸

(うえた まさゆき／経営学部講師)

本書は、TOC (Theory of Constraints : 制約条件の理論) の原理を分かりやすく解説した、小説スタイルのビジネス書である。TOCは、“目的(ゴール)を達成するうえで最も弱い部分(制約条件、ボトルネック)を発見し、そこを集中的に強化・改善することにより、全体最適をもたらそう”という経営管理手法である。分厚い本であるため、なかなか手が伸びにくい本かもしれませんが。しかしながら、一度読み始めると、小説スタイルという本書の工夫により、一気に引き込まれてしまうでしょう。

物語の主人公は、収益体制が改善されなければ閉鎖されることが決定している工場の工場長です。主人公は、大学時代の恩師から少しずつヒントを受けながら、TOC

の原理を学んでいくことになります。収益体制の改善は、まず、工場のボトルネックを探すことから始まりです。“ボトルネックを探すこと”の重要性を、主人公は、たまたま引き受けたボーイスカウトのハイキングの引率で実感します。間隔がまちまちになり、全体が長くなっている隊列と、製品を作るための作業が重なって見えたのです。隊列全体を長くする原因となっているボトルネック(ハービー君)を見つけて隊列をうまく管理できた経験を、工場にも適用していきます。その後も、いろいろな改善が進められていきます。

TOCは様々な分野に応用できるものです。図書館でぜひ読んでみてください。



本の運命

文＝切替英雄

(きりかえ ひでお／工学部准教授)

手書きとコンピュータ編集では勝負にならない。ドキュメント生産効率が違いすぎるのでね。19世紀イングランドで手縫いの内職をミシンに奪われた貧しい母さんや娘さんの絶望が偲ばれる。テキストを量産して雑本の山を築いている大学教授の友人がいるけれど、ご本人はモニターを見ながらキーボードをカタカタ打つのが気持ちよくなってしかたないだろうな。一打一打が作品を紡ぐ。堪えられないのは分かるけどさ。確かに死んだお袋が使っていたシンガーの足踏み式ミシンは滑らかで心地よかった。

コンピュータ編集は、比較を絶する効率の良さがあるけれど、改稿がたやすすぎて、いつまでも本文が確定しない。つまり決定稿が上がらない、という恨みがある。宮澤賢治のような締め切りのない推敲魔にはたまらないだろうけど。が、ほんとうは、決定稿なんてないんだけどね。中国人なんて何百年もかけて一つの物語をこねくり回すからね。それで原作者が誰かも分からなくなっちゃう。「水滸伝」の一番巻数が多い版が日本でしか伝わっていなかったりして。それを見て来日中の魯迅もびっくりしたそうだね。

赤インキの書き込みや抹消棒線だらけの賢治の原稿、木田金次郎が一旦売った絵の修正に客の家まで押しかけた逸話、前田青嶺が「洞窟の頼朝」（重文）を直したくてしかたなかったが、美術館に入れられちゃって直せなかったもどかしさ。これらクリエイターの思いは尊いことだが、改訂は困難を伴うものだった。けれどテキスト生産に関する限り、今は余りに容易になった。しかも改稿の跡をとどめない。おまけにデジタル化された情報はコピー劣化しないから、改作したものが無数にばらまける。もう「原作」なんていうことも無意味になる。

生産効率がべらぼうに高いので、今では大部の書籍がどしどし発行される。昔の本はもっとスマートだったな。品数もこんなに多くなかった。もうすでに人民は量産されるドキュメントに飽きているんでないかな。

ほとんどのドキュメントが冊子体の書物（コデックス）でなくて、ネットで配信され、デジタル画面で読まれる

時代になる。卷子本^{かんすほん}がコデックスに駆逐されたように、今度はコデックスが駆逐される。手稿本が印刷本に追放されたように、印刷本が電子本に追放される。コデックスは工芸品となってわずかに生き延びる。オレなんか製本家の柗折久美子の仕事なんて好きだから工芸品化は大歓迎だ。本屋には今まで無線綴じの粗悪な本^とを作ってきた罰^{とが}くらいに思っている。思えば岩波文庫が糸綴じをやめたのがオレの学生時代のことだったか。あれから手になじまない嫌な感じになった。開いたままの読み止^{よみどし}しにさえできなくなった。あれが日本の名門書店なんだから情けないよ。おまけにブックデザインをカバーデザインだと勘違いしている装丁家^{そうてい}がいる。オレなんか読むのに邪魔だから、帯やカバーは容赦なくはぎ取ってゴミ箱に捨てる。はぎ取ると無表情な表紙が現れ、悲しい気持ちになる。万事安上がり。素敵なお表紙と背表紙と裏表紙が半透明のグラシン（古くはパラフィンと呼ばれた）にくるまれていて、糸でかかられていて、一字一字がいい香りのする紙面に深々と刻印されたように刷られていて、おまけに朱の著者検印まであった頃の本が懐かしいよ。ブックカバーなんてなかったんだ。背表紙で思い出したけど、書名なんていうのも、今では小口の幅いっぱいデカデカと厚かましく刷られているが、昔はもっと小さな活字で慎ましく上品に刷られていたものさ。

出版社がなくなれば誰でも作品が発表できるようになる。ただし、すべてがサイバー空間の中の私家版になる。しかも誰もが原作者になりすまし改稿の手が入れられる。「文は人なり」の「人」がいなくなっちゃう。何世代もかけて物語を作ってきた中国人のあざれた気の長さには敬服するが、それが気の短い現代人にでもできるようになる。山のように異本（別本）ができる。本文批判なんか馬鹿らしくてやってられなくなる。だって原作者自身が次から次へと改作していくからね。真贋^{しんかん}の別がなくなり、決定本だとか定本なんて言うのも愚かになる。文芸というものがすっかり変わりそうだね。コピーライト（版權）なんかじゃ食えなくなるよ。それは言語芸術の宿命だったのさ。言語作品は元来がデジタル情報だから。そ

もそも言語なんていうのは、二十数万年前に未分節（アナログ）の自然界に人間が持ち込んだ離散的（デジタル）な記号体系だったんだよ。そして言語記号はいくらでもコピーが可能で、しかも劣化しない。文字のない時代は脳というハードディスクにそっくりコピーしたものだ。だから詩人はいつの時代でも食えなかったのさ。脳に複製品を作るのはフリーだから違法コピーにならない。詩は口伝で次から次へとコピーされていった。ネット時代と原理は同じ。これからは、言語芸術で稼ぐのはきっぱりあきらめるか、でなけりゃ、歌のライブや芝居や漫才のような語り、つまり一期一会の発物だね。文字

無き民へ先祖返りするだけさ。

この前居酒屋で札幌の出版社の社長Aさんに会ったおり、「Aさんのとこ、どう対応するんだい」と尋ねたら、たちまち不機嫌になられた。「紙で読むのが好きな人がある限り、本はなくならないと思うわ。」とおっしゃるんだけど、そんな人、千に一人いるかいけないかの時代がもうすぐやってくる。これはおもしろくない酒になりそうだなって、話はそれっきりにした。一介の文芸愛好家たるこのオレが千の一人に留まるかどうかは、元来無節操な人間だから今は断言できない。

アルバート・ク

『ノルウェイの森』への再訪

文＝左 媛

（さ えん）

経営学研究科／経営学専攻

多くの文学愛好者が最も楽しみにしているのは、12月11日に上映された『ノルウェイの森』という映画ではないでしょうか。

映画を楽しみにしている人の多くは、『ノルウェイの森』という小説のファンだと思います。わたしはそのファンに含まれる1人の留学生です。この小説は日本では1987年に刊行されましたが、わたしが読んだのはそれから約15年後の2002年でした。

当時、大学に入学したばかりの私には、この小説の背景がよくわからず、ただ日本の若者の生き方を知るためのものとして読み始めました。しかし、読み始めるとすぐに、孤独感に満ちた小説の世界に入り込んでしまいました。

「直子が二十歳になるというのはなんとなく不思議な気がした。僕にしても直子にしても本当は十八と十九のあいだを行ったり来たりしている方が正しいんじゃないかという気がした。十八の次が十九で、十九の次は十八、——それならわかる。でも彼女は二十歳になった。

そして秋には僕も二十歳になるのだ。死者だけがいつまでも十七歳だった。」

この短い文章は、わたしにだけではなく、中国で80年代生まれの若者たちに共感を呼び起こしたようです。国が豊かになりつつある環境のなかに生まれた80年代生まれの人は、家庭内では基本的に1人っ子で大事に育てられました。それと同時に彼らは、仕事で多忙な親と言葉を交わす機会が乏しく、常に孤独感を抱いて生きてきました。そこで彼らは、十数年も前に書かれたこの小説を読み、思春期に感じた儚さや悲しさを言葉で確認することができ、満たされた気分になったのです。

小説『ノルウェイの森』に登場する主人公の思春期の行動や感情に共感した人は多いと思います。上映された映画は、小説の中の「深く愛すること、強く生きること」に特に焦点をあてたものとなっているということです。そこで私自身は、その点をもう一度、じっくり考える機会になればいいなと思っています。

2010
年度

図書館利用ガイドンス

アンケート結果速報

2010年度も、図書館では様々なガイドンスを行い、たくさんの方に参加していただきました。ガイドンスの際、参加者の皆さんに記入していただいたアンケートの集計結果がまとまりました（2010年12月現在）。

※ここに掲載されているアンケート結果は一部のみです。アンケート結果の詳細（2010年度完全版）や今後のガイドンス日程等につきましては、図書館ホームページに随時アップロードしていく予定です。

①オリエンテーション

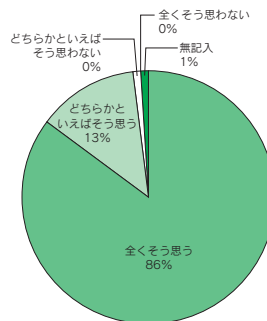
主に新入生を対象に、図書館の基本的な利用方法を説明します。本の探し方から貸出・返却方法、閲覧室の見学なども行います。

参加者数 727名
実施期間 2010年4月～2010年5月
実施回数 48回

■今回のガイドンスに参加してよかったと思いますか。

	人数（名）	構成比（％）
全くそう思う	515	86.0％
どちらかといえばそう思う	77	12.9％
どちらかといえばそう思わない	3	0.5％
全くそう思わない	0	0.0％
無記入	4	0.7％
合計（※）	599	100％

※参加者数との誤差は未回収分アンケート等による。



■満足できた点・満足できなかった点について、具体的に記入してください。

[満足できた点]

- I. 説明が丁寧・親切・分かりやすかった点。
- II. 今後、図書館を利用してみたいと感じた点。
- III. たくさんの本に驚いた、感動した点（蔵書の豊富さ）。
- IV. 書庫を見学できた点。
- V. 図書館の基本的な使い方（貸出・返却、OPAC等）が理解できた点。

担当講師からのコメント ご好評いただき、担当者一同、大変嬉しく思っています。励みになります！支持していただいた部分は継続し、より良いガイドンスにしていきます。

[満足できなかった点]

- I. 書庫を自由に出入りさせてくれればありがたい。
- II. 説明時間が長すぎる点。説明時間が足りなかった点（進行の拙さ、説明時間の短さ等）。
- III. （書庫の）エレベーターが狭く、揺れたりして、怖い等の不安を感じた点。館内（閲覧室、書庫）が暑い点。
- IV. ゆっくりと書庫見学できなかった点。
- V. レファレンスサービスがよくわからなかった点。

担当講師からのコメント I：理想的には自由に見られるのが一番なのですが、図書館の構造上、難しい問題です。すみません… II：難しい問題ですが、より良いバランスになるよう工夫します。 III：エレベーター、点検では問題ないんですけどね…。館内環境の改善には今後も継続して努めます。 IV：もう少し時間を取れるよう工夫していきたいと思います。（もしくは、入庫の手続きをすれば、個人でも中に入れますよ） V：ガイドンスに参加してくれた方にわかりやすく説明できるよう改善に努めます。

みなさんの意見を参考に、さらなる充実を図っていききたいと思います。今後ともよろしくお願いします。

②文献検索セミナー

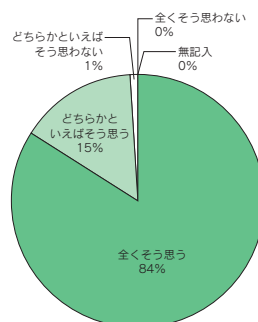
主に2年生以上を対象とし、オンライン・データベース等を駆使しながら、必要な文献を入手するための方法を説明します。

参加者数 251名（1年生：120名、2年生：129名、3年生：93名、4年生：12名、その他：11名）
実施期間 2010年6月～2010年12月
実施回数 20回

■今回のガイダンスに参加してよかったと思いますか。

	人数（名）	構成比（％）
全くそう思う	183	83.9％
どちらかといえばそう思う	32	14.7％
どちらかといえばそう思わない	1	0.5％
全くそう思わない	1	0％
無記入	1	0％
合計（※）	218	100％

※参加者数との誤差は未回収分アンケート等による。



■満足できた点・満足できなかった点について、具体的に記入してください。

【満足できた点】

個人的な質問やキーワードに対応してもらえたのが嬉しかったのと、使い方がより体験的にわかりました。／わかりやすかった・理解できた。（親切・丁寧・詳しい・聞きとりやすい・はっきり・スピード）／図書館に無かったらどうしたらいいのかわかっていたので助かりました。／OPACやCiNiiなどの利用の仕方がわかった。／自分で探しながらのセミナーだったのでわかりやすかった。／パソコンが苦手な人にも、説明が丁寧で分かりやすかった。

担当講師からのコメント 参加者の声を励みに、より良いガイダンスにしていきたいと思います。

【満足できなかった点】

少々説明が駆け足気味だった。／話が長い。要点を絞ってほしい。／検索の仕組みが複雑で使い分けが大変そう。／時間が経つと忘れそう。

担当講師からのコメント 不慣れな進行で、申し訳ありません。さらなるレベルアップを目指します。

使っていくうちに慣れて、様々な機能を使いこなせる部分もありますので、今後ともご利用のほどお願いします。

■図書館利用ガイダンスに関する意見や要望などがあれば、自由に記入してください。

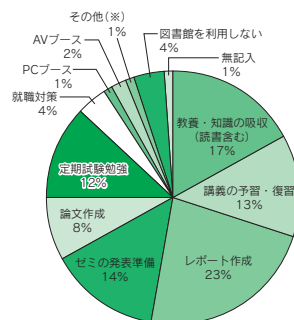
これから利用してみたいと思いました。／図書館活用の例など具体例がもっとあるといいとおもいます。もっとこういう機会を増やしていったらいいと思います。文献検索の仕方は前期のうちにやってくれるとありがたいです。／課題の解説を丁寧にやってほしい。／ゼミやレポート作成などで必ず必要になる作業が含まれているので定期的に関われるといいと思います。

担当講師からのコメント さらに多くの学生が参加できるよう、よりよい広報を考えていきたいと思っています。

学生が満足できるガイダンスに少しでも近づけるよう頑張ります。みなさんの声をもっと聞かせてください。

■日頃、どのような目的で図書館を利用しますか。（複数回答可）

	人数（名）	構成比（％）
教養・知識の吸収（読書含む）	86	17％
講義の予習・復習	67	13％
レポート作成	117	23％
ゼミの発表準備	72	14％
論文作成	40	8％
定期試験勉強	61	12％
就職対策	19	4％
PCブース	7	1％
AVブース	9	2％
その他（※）	5	1％
図書館を利用しない	18	4％
無記入	5	1％
合計（のべ）	506	100％



③カスタマイズ・ガイダンス

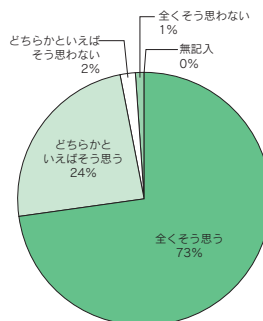
学部学習内容に連動させた複数ゼミ用のガイダンスで、図書館の紹介・OPACの利用方法の他に、学部により異なったデータベースを用いて、その使用方法を説明します。(2010年度は経済学部・経営学部・法学部で実施しました。)

参加者数 727名(1年生:727名) 実施期間 2010年4月～2010年6月 実施回数 18回

■今回のガイダンスに参加してよかったと思いますか。

	人数(名)	構成比(%)
全くそう思う	524	73%
どちらかといえばそう思う	172	24%
どちらかといえばそう思わない	14	2%
全くそう思わない	8	1%
無記入	3	0%
合計(※)	721	100%

※参加者数との誤差は未回収分アンケート等による。



■満足できた点・満足できなかった点について、具体的に記入してください。

【満足できた点】

わかりやすかった・理解できた。(親切・丁寧・詳しい・聞きとりやすい・はっきり・スピード) / スライドがあつたので、行ったことがなくても図書館内の配置が分かった点。 / 写真がたくさん出てきて面白かった点。 / データベースのことを知れて、使い方も教えてもらえた点。 / パソコンが苦手な人にも、説明が丁寧に分かりやすかった。

【担当講師からのコメント】 大変励みになります。これからもより良いガイダンスになるよう工夫していききたいと思います。

【満足できなかった点】

図書館紹介の写真をもっと増やして欲しい。 / パソコンに慣れてない人には、操作の説明や全体の進行が早すぎる。 / データベースを使う時間ももっと欲しかった。 / 入学後すぐに行われてほしかった。 / 課題をやる時間が足りなかった。

【担当講師からのコメント】 ご指摘、ありがとうございます。改善に努めます。 / スライドはさらに見やすくなるよう改良したいと思います。 / データベースの説明や課題に関しては、どのような配分で行うのが良いか、今後の課題として検討し、より良いガイダンスになるよう努めます。今後ともご利用のほどお願いします。

■意見や要望などがあれば、自由に記入してください。

履修ガイダンスと同時期に利用ガイダンスも行っていきたい。 / 図書館はいつも静かで勉強するにしても、読書するにしても居心地が良いです。 / こういうゼミの中で説明してくれてるのでとても助かります。来年以降も続けて下さい。 / トラブルが起こったときの対処法をもっと早くした方がよいと思いました。

【担当講師からのコメント】 たくさんのご意見を頂きありがとうございます。意見を参考にによりよい広報を考えていきます。学生が満足できるガイダンスに少しでも近づけるよう頑張ります。みなさんの声をもっと聞かせてください。

お知らせ

携帯電話で北海学園大学附属図書館のOPACが検索できるようになりました。モバイルOPACでも図書館の資料が検索できます。是非ご利用ください。(携帯端末以外では利用できません)
アドレス: <http://library.hokkai-s-u.ac.jp/mobileopac/>

編集後記

人生、楽しんでいますか?
なにか今、自分の生きがいがありますか?
生きがいを持つことはとても大事なことです。(専門家ではないので断言はできません)
その時その時しか出来ないこと、学生の時しかできないことはたくさんありますから何事もまずやってみる事チャレンジ精神が大事だと思います。(生意気なことってすみません。)

見つけれない人は図書館に来てみてください。
いろんな分野の本がありますし、新しいDVDも豊富です!
3階の体育・スポーツ関係は書籍一新で新しいものばかり読みたいものに必ず迷うはずですよ。
是非、図書館に足を運んでみてください! みなさんの来館をお待ちしておりますm(_ _)m
まずは一歩踏み出してみませんか?

北海学園大学附属図書館報 図書館だより 第32巻4号 (通巻196号)

本館 〒062-8605 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号 工学部図書室 〒064-0926 札幌市中央区南26条西11丁目1番1号
TEL (011) 841-1161 (本館内線) 2273・2274・2275 (工学部内線) 7813・7814 印刷所: (株) アイワード